

## 「アブラムとの契約」

2020年12月16日

日が沈み、暗くなった頃、煙を吐く炉と燃える松明がこれらの裂かれた動物の間を通り過ぎた。こうしてその日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」(創世記15章17節～18節)

聖書において、「契約」は重要な意味を持っている。契約とは、両者が互いの言い分、主張を受け入れ、それらを厳守することによって互いの生存を保障し合う約束事である。

神はアブラムにまた現れて、「私はこの地をあなたに与えて、それを継がせるために、あなたをカルデアのウルから導き出した主である」と言われた。アブラムは、この言葉に対し、「主なる神よ。私がそれを継ぐことを、どのようにして知ることができるでしょうか」と問いかけている。15章6節では「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と、子孫に与えられる祝福の言葉を信じたと書いてあったが、今、アブラムは神の祝福の約束に疑いを持ち、あなたの約束をどのように知ることができますか、約束の徴を示してくださいと、懐疑を率直に訴えている。アブラムの懐疑を記しているのは、信仰は一度、心に決めたからといって、そのまま守り貫くことはできず、信の中にも不信が湧き起こるということを示しているのではないか。実際、アブラムは、この後も、幾つかの過ちを犯している。

神はアブラムの徴を示してほしいという要求に応えている。アブラムに、三歳の若い雌牛、三歳の雌山羊、三歳の雄羊、それに山鳩と鳩の雛を持って来させ、牛、山羊、羊は真ん中から切り裂いて、互いに向い合せて置かせた。鳥は裂かなかった。猛禽が血の臭いを嗅ぎ、死体の上に舞い降りて来た。アブラムは、それらを追い払った。これは当時、契約を結ぶ時の儀式である。家畜を二つに裂いて、向かい合わせに置く。その間を、両契約者が通り過ぎる。もし、約束を破った場合は、体を二つに引き裂かれても構わないとする。契約は互いに命をかけて、約束して成立するのである。日が沈みかけた頃、アブラムは深い眠りに落ち、恐怖と深い闇が襲った。その眠りの中で、神の言葉を聞いた。あなたの子孫は異国の地で寄留者となり、400年の間、奴隷として仕え、苦しめられる。しかし、彼らは多くの財産を携えて、そこから出てくる。アブラムの子孫はエジプトで奴隷となり苦勞するが、やがて解放される「出エジプト」が預言されている。これは、後に書かれた文書であると解釈されている。出エジプトを知った者が「事後預言」として、加筆したのである。また、アブラムは良き晩年を迎えて葬られ、安らかに先祖のもとにいくと、幸いな晩年が預言されている。重要なのは、その先である。日が沈み、暗くなった頃、煙を吐く炉と燃える松明が裂かれた動物の間を通り過ぎた。神ご自身が通り過ぎたのである。しかし、アブラムは通り過ぎていない。契約の儀式では両契約者が共に、裂かれた動物の間を通り過ぎるのであるが、この時、神だけが通り過ぎ、アブラムは通り過ぎていない。もし、アブラムが通り過ぎ、契約を守らなければ、不誠実の故に、家畜のように体は二つに裂かれることになる。神は、アブラムの不信仰、不誠実を知っておられ、アブラムに通り過ぎることを要求されなかった。神はアブラムとの契約において、人間は約束を破ることがあるけれども、「あなたの子孫に与える」という神の約束は必ず守られるということ、この徴において示されたのである。神との契約は、人間の弱さを顧み、神が約束を遵守するという一方的な契約であった。